ビジネスどりぃむ　5号

代表弁護士 松江 仁美
所属：東京弁護士会
出身大学：中央大学法学部

「あ、そう」の帝王学
～リーダーに求められる「いなす」術～

もともと、大雑把な性格ではあったのですが、最近とみに大雑把になってきて、何を言われても驚かなくなってきたように思います。とりあえずは、すべて、「あ、そう」という返答ですましてしまっている感じです。

いつからだろうと、記憶をたどると、どうも、２０年以上も前、２人目を出産したときかなあ、と気づきました。出産の時の陣痛というのは、それはひどいもので、陣痛が来たときに、「しまった！」と思ったのを覚えています。なんで「しまった！」という反応かですって？それは、１人目の出産の時にこのひどさを知っていたのに、なぜ忘れてしまっていたのだろう、ああしまった！という意味ですよ。この陣痛のひどさ、出産後も覚えていたら、誰も２人目作らないですよ。その意味で、出産したら忘れちゃう、というのは人類が死滅しないための天のしかけなのでしょうね。

冗談はこれくらいにしますが、この頃から、人生においては、それほど驚くこともそれほど大騒ぎすることも、起こりはしないのだということに気づいてきたように思います。私は常に新しいことを求めて、よせばいいのに、かなり刺激的な人生を送っておりますが、その私でさえ、人生にそれほどの悲劇も喜劇も驚愕も無い、というのが行き着いた実感です。もともと幼年時代に一度死にかけたことがあり（また機会があったら、お話ししますが）、５才から拾った命を生きているからというのもあるのでしょうが、、、。

それで、表題の「あ、そう」です。何を言われても、とりあえず、私は気づくと「あ、そう」と応えています。だからなんなのだ、と言われそうな返答ですが、でも、究極やっぱり、いつも「あ、そう」なんですよ。

「え―っ」と驚くことも無く、「きゃ―っ」と喜ぶことも無く、「何だそれは」と怒ることも無く、まずは「あ、そう」です。

実はこのフレーズ、どこかでよく聞いたことありませんか？５０才以上の人はわかるはずです。そうです、先々代の天皇陛下であられた昭和天皇の晩年の口癖です。

昭和天皇が九州を旅行された折、随行員から、あそこが〇〇山、あれが〇〇山と説明を受け、天皇陛下は「あ、そう」といつも通りお答えになりました。ところが、急に「あの山は何？」と予期しない山を指して聞かれたそうで、随行員が山の名前がわからず、全身に冷や汗をかきながら「あれはただの山です」と答えたところ、その返事も「あ、そう」だったとか、、、。真偽はともかく、有名な話です。

単なる社長と違い、その一言で、国家に激震が起こりかねない地位にいる方です。当面は何があっても、「あ、そう」と受け止め、誰もいないところで抱腹絶倒したり、逆に石ころ蹴って怒ったりされていたかもしれません。あくまで想像ですが。

だから、リーダーにとっては、まずは「あ、そう」で、いなしておくことが大切になってくるのではないでしょうか。本当にあるべき反応など、ゆっくり家に帰ってから考えればよいのです。

ところで、最近ようやく私にもわかってきたことがあるのですが、世の中には、幸福や不幸といったものは存在しなくて、ただ「事実」のみがあるのではないかと。その「事実」に、幸福や不幸という色を塗るのはその人の勝手なのではないかと。

であれば、企業のかじをとるリーダーは、起きた事象をいったんはそのまま「あ、そう」と受け止め、それから、自分の組織にとって、一番いい色に塗っていくのがもっともいい方法なのです。「あ、そう」は、リーダーの究極の模範解答かもしれませんね。

法律コラム

将来仕事がAIに奪われる!?

近年、AIつまり人工知能の発展が目覚ましく、様々な業種でAIが導入され、活用され始めています。

AIに対しては、大きな期待がある反面、「AIの判断が正しいかはどう判断するのか、結局人間のチェックが必要ではないか」「故障、暴走して人間に害を与えた場合はどうするのか」等の懸念もあります。

人間とAIの対立というのは、SFでは古くから扱われているテーマですが、最近では「こんな仕事が将来AIに奪われる」などと、その仕事をしている人にとっては不愉快極まりない記事も珍しくなくなりました。

では本当にAIに仕事を奪われるのか、逆に言えばどんな仕事が奪われないのでしょうか。これについて参考となるのが、2013年にアメリカのマイケル・オズボーン准教授が発表した「未来の雇用:いかに仕事はコンピュータ化されていくか」という論文です。

これによると、AIでは難しい仕事の要素として、①「多様な価値観を持つ人と議論し、結論を導くコミュニケーション能力」、②「課題に挑戦し成果をあげるなどのチームワークが必要な仕事で、人を束ねるマネジメント力やコミットメント力」、③「別々の情報を結びつけることによって新たなアイディアや価値を生み出す発想力と思考力」というもので、つまりこうした社会性や創造力に関する要素は、現段階では人間の専売特許なので、こうした要素を持つ仕事は将来AIに奪われる可能性が低く、逆にそうした要素が無い仕事は奪われやすい、というわけです。

しかし考えてみると、こうした「社会性」や「創造性」という要素は、どんな仕事にも程度や態様の差こそあれ共通しているのではないでしょうか。

人間は一人では生きていけません。どんな仕事でも人と全く関わりを持たないことは不可能です。その意味で社会性の無い仕事はあり得ません。

また、効率性を改善したり、新しいビジネスに繋げたりと、新しいものを作るというのもあらゆる仕事に共通しているものと言えます。

結局、AIに奪われる仕事というのは、特定の業種や職務を指すのではなく、人に対する配慮を失い、新しい価値の創造を放棄した人の仕事ではないでしょうか。

弁護士も同じです。単に法律や裁判の知識を伝えるだけではAIで十分です。そうではなく、そうした知識を前提としつつも、いかに依頼者に寄り添い、より良い解決や利益を創造していくか、そうした視点を今後も大事にしたいと思います。

弁護士 氏家 大輔
所属:東京弁護士会
出身大学:中央大学法学部

DREAM昇殿参拝&新年会

皆さまこんにちは。業務スタッフの金原です。2019年も幕を閉じ、いよいよ2020年オリンピックイヤーとなりました。オリンピックイヤーですので、「今年は運動しよう!」と思っている方も多いかと思います。(私もそのうちの一人です(笑))有言実行、いろいろなことに挑戦していこうとDREAM一同活気づいておりますので、皆さま、本年も暖かい目でお見守りいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

さて今回は毎年恒例の神田明神への昇殿参拝と新年会について、お話させていただきます。毎年弊社では、縁結びや厄除け、商売繁盛で名高い神田明神へ昇殿参拝をしております。今年も、昨年のお礼と今後の様々な方たちとの良縁や、様々なことに「勝つ」ことを願って、御祈願へ行ってまいりました。

同日の夜は「本年も協力してDREAMを盛り上げていこう」ということで、新年会を行いました。利用させていただいたお店は「LOBBY LOUNGE 東京 HIBIYA BAR」さんです。京橋駅直結のエドグランに入っているお店で、飲み放題のコースでもオリジナルカクテルが楽しめるお店です。乾杯のシャンパンも付き、全7品のお料理もとっても美味しく、満足のいく新年会が行えました。

また再訪したいと思えるようなサービスでしたので、機会があれば皆さまも是非ご利用してみてください。